幼年教育研究年報　第24巻
The Annual Research on Early Childhood, 2002, **24**,103-109

資　料

保育者の子ども観と教育課程に関する一考察

石田　裕子[1]・　芝崎　良典[1]・　山崎　晃[2]

An Essay Regarding to Kindergarten Teachers' Belief about Children and Curriculum : How They are Concerned?

Yuuko Ishida[1], Yoshinori Shibasaki[1] and Akira Ymazaki[2]

The main purpose of this study is to research the correlation between kindergarten teachers' views towards children and the curriculum. Through the interviews, the teachers were asked about the details about how the curriculum came about , their belief in children and human beings, and the points to be considered for a new curriculum if they would make one. They had different views towards children, however, they share the desire to help children foster good relationships with each other. This study concludes that it is essential for new staff to understand the concept of the curriculum, and the findings from the research, especially the concerns about childcare, should be reflected in the new curriculum.

Key Words: kindergarten, kindergarten teacher , belief about children, curriculum

はじめに

「教育課程」とは,「学校教育の目的や目標を有効に達成するための教育内容を幼児・児童の心身の発達に応じ,組織配列した学校における教育計画の全体である」とされている（森上, 1980)。一般に教育課程の編成というときには,園長の責任において,教育法規や「幼稚園教育要領」「保育所指導指針」に準拠し,幼児の実態（幼児の心身発達の実状,家庭環境,生育歴,興味や欲求の方向,既有経験など),幼稚園・保育所の実態（保育年限,園地・園舎の状況,施設・設備,園の規模,クラス編成,保育者など),地域の実態（自然環境,社会環境,社会的施設,歴史的背景,教育的環境）に基づき保育目標を設定し,保育方針を定めることをいう。そしてさらに,保育日数,保育時間を決める。これらは幼稚園・保育所が国の許可した公的機関であるという点から法的な手続きとして押さえられる事柄である（小川, 1992)。小川（1992）は,保育は子どもに対する援助という働きであるという視点に立つならば,幼稚園における教育課程は小学校以上の教育活動における教育課程・指導計画とは異なった意味が考えられる必要性があると述べている。彼は,保育は幼児の自主的・自発的活動を尊重し,その育成を願うゆえに,保育者の幼児へのかかわりは援助という形で行われるべきであり,遊び中心の保育は,幼児が自ら取り組むよう活動を援助しなければならないからであるとしている。幼稚園教育要領では教育課程の編成について以下のように記述されている。各幼稚園においては,法令及びこの幼稚園教育要領の示すところに従い,創意工夫を生かし,幼児の心身の発達と幼稚園及び地域の実態に即応した適切な教育課程を編成するものとする。(1)幼稚園生活の全体を通して第2章に示すねらいが総合的に達成されるよう,教育期間や幼児の生活経験や発達の過程などを考慮して具体的なねらいと内容を組織しなければならない（幼稚園教育要領, 1998)。

ところで,教育課程とはどのように利用されるものなのであろうか。ふたたび,小川（1992）による教育課程についての論文を引用する。教育課程の実施とは毎日の保育の営みに関わる指導計画の作成と評価であ

1　広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
2　広島大学教育学部附属幼年教育研究施設教授

る。「指導計画」は具体的な指導のねらいや，内容，指導の仕方など具体的計画を意味する。これは園長の責任ではあるものの，保育の実際にあたる保育者がつくることになる。教育課程（保育計画）という基本的全体的計画に基づいて，実践的，部分的計画としての指導計画があり，さらにその短期的なものを週案，日案と呼んでいる。（中略）「教育課程」の中核にある「指導計画」の作成と実施は，保育者が幼児の具体的な姿を捉えて作成されるものであるから，法的な手順とは異なる視点で捉えられるべきものである。そしてその時に柔軟性・弾力性が求められるのである。この要求は，法律に従って「教育課程」を編成していく思考とは明らかに異なっている。なぜなら後者は，編成において計画の全体の枠組みを確定する思考であり，前者は変化する幼児に沿って援助を実施していくための方針づくりだからである。

そこで具体的に「指導計画」を作成する保育者の立場においては「教育課程」の基本的枠組みに沿いつつ，いかに柔軟性を発揮して「指導計画」を作り，具体化するかが課題となる（p. 43）。（中略）

長期指導計画は１年間でやるべき活動のタイムではなく，これまでの園生活のなかで蓄積されてきた慣習性と習慣性によって，保育者や幼児（園生活を既に経験したもの）の中に伝承されてきた生活感覚を明文化し，記載したものである。つぎに年間指導計画のもうひとつの大切な視点として，幼児の発達の過程を踏まえるということである。しかし各園での発達の尺度は，常に各園の特殊性を含んでいる。各園での経験知（保育者が幼児との出会いの中で捉えてきた幼児の発達の姿）とみなすべきである。そうでなければ，各々の園の特殊性は現れることはないからである（p. 52）。

山崎・鳥光・七木田・石田・中坪・縫部・米神・林・道下・松本（2001）は，幼稚園の教育課程はどのようにとらえられているかということを幼稚園保育者へのインタビューを通して，明らかにした。そのインタビューの視点は，1. 教育課程編成の基礎とは何か，2. 実際に今ある教育課程をどれくらい利用しているか，3. 教育課程の見直しについてはどう考えているか，4. どのような子ども観・人間観を持っているか，5. どのような保育感を持っているか，6. 保育者の役割をどのように捉えているか，などであった。教育課程の編成の基礎について，彼らは，特に教育課程をどのようにとらえ，どのような要因を考えて編成すべきかという点に焦点を当てて考察を行った。そのなかで，教育課程は保育者が日々の生活をしながら，子どもの姿や育ちについて確認するために使用されている側面があることが示された。

ところで，「子どもが育っていく過程というものは，保育者自身の頭の中にあるのではないか」という立場をとることもできると考えられる。保育者は各々の子ども観を持っている。「日々の生活をしていく中で，起こってくることについての考え，発達の道筋は自分の中にはあると思いますが，それを書いて出してくるとなると自分の中で不安なところがあります」という，保育者の本音を聞くこともある。この保育者の言葉に保育者の頭の中での子どもの姿と教育課程の関連の一端が示されているのではないかと考えられる。そこで，本研究では，保育者の子ども観・人間観が，教育課程にどのように関わっているのか，という点についてインタビューした事例を挙げながら，検討し，考察を行う。

研究の対象園は，国立大学の附属幼稚園である。本研究では，以下の三点についてインタビュー調査を行う。1. 対象園での教育課程の作成の経緯と内容について。2. 保育者各々が保持している子ども観や人間観はどのようなものであるのか。3. 現在の教育課程を見直すとすれば，どのような点について考えるか。これらについてのインタビューの結果をふまえて，保育者各々の子どもの姿というのは具体的にはどのようなものであるのか，また，それと，教育課程や実際の保育との関連について考察を行う。

方法

対象者：国立大学附属幼稚園　教師4名
インタビュアー：本研究者2名
インタビュー時期：平成12年7月31日，8月24日，12月22日の３回

インタビューは，対象幼稚園にて行い，原則として，インタビューの対象となる教師とインタビュアー２名で，個別に行われた。質問項目によっては，全員で集まって行われたものもある。文中でのIは，インタビュアーであり，A，B，C，Dは幼稚園教師である。インタビューの内容は，MDレコーダーにて記録し，文字化した。本文中には要約したものを掲載する。なお，インタビューの（　）内は筆者によるものである。

結果と考察

１．現在の教育課程の作成の経緯について

I：教育課程に関する歴史的な流れのようなものを教えていただけませんか？
A：わたしがここに来させてもらったときには，

教育課程はなかったです。その理由としては，当時の園長先生が仰るには，それぞれの保育者の頭の中にはちゃんとしたものがあるから必要ないということでした。子どもが本来，やりたいと思っていることは，こちらが計画してやりましょうということではなくて，子どもが自然に遊びの中から生み出していくものです。教育課程とか指導計画があることで，そういうことを無視して，こちら（保育者）の意図で，全部進めてしまうからよくない，ということで必要ないということでした。

しかし私たちは，活動自体は子どもが選んでいくんだけれども，発達の道筋っていうのは，やはり，（保育者の共通認識として）押さえておきたいと思いました。子どもに援助をするときに，曖昧さがあると子どもの発達の道筋を本当に踏めているかどうか，不安なので，必要だと思って作りました。内容的には，子どもは本来，伸びてく力をもっているから，あんまり変な手出しはしないとか，変に知的にどうのという観点よりも，人間が人間となっていくのに最低限こんな道筋はたどっていかなくてはいけないだろうなあっていうことに限定して，簡単なものを作りました。

その後，平成2年に，幼稚園教育要領が変わりました。それに対応した教育課程を作るというのは，重要な幼稚園の課題だったんです。そこで，わたしたちは子どもの自己実現に関する研究をずっとやっていましたので，それに沿った，本園独自の教育課程を作ろうではないかということで，平成8年に教育課程を作りました。

I：現在の教育課程を作るにあたって，きっかけとなったのは3歳児クラスができたことも関係あるのでしょうか？

A：いいえ，自己実現の研究の一番大きな成果として，援助の方向性を求めていくということがありました。3歳児クラスができたということはきっかけになったのは確かなのですが。

対象園では，A教諭が赴任する以前まで保育者経験の長い，いわゆるベテランの保育者が保育を担当してきたという経緯があった。文字化された教育課程がなくても，保育に関する信念や子どもの姿（保育者の頭の中にあるもの）があるという前提のもとに，教育課程が存在しないということであった。これは教育課程や指導計画の多くが，子どもを不在にしたまま，保育者が頭の中で作成し，それに沿って，課題を子どもに押しつけてしまう危険性があることを危惧した「ノーカリキュラム主張」（平井，1989）に沿うものだと思われる。この，インタビューの中での，「保育者の頭の中にあるもの」というものは，子どもが自らやりたいと思う活動を援助し，また，発達の道筋のようなものが描かれているということであると考えられる。しかし，インタビューの中でも述べられたように，「教育課程が必要である」という保育者の意識から，平成8年に作成されるに至った。この経緯や教育課程の利用のしかたについては山崎ら（2001）の研究に詳しい考察がある。そこでは，「保育をしていく上でのガイドの部分と，迷った場合に確認し，安心するための存在としての教育課程」というものが示されている。しかしながら，一方で保育者は，「この幼稚園の教育課程は緩い-それほど厳密ではない-ので，自分で工夫をする余地がある」であるとか，「教科書のような感じでは教育課程をとらえてはいない」ということも述べられている。各々の保育者は，教育課程が必要ということは認識しているけれど，自分の保育ができるということの重要性についても述べている。この自分の保育というものを行う上での基本となるものに，各保育者の子ども観や人間観がある。それを明らかにするために，各保育者に子ども観と人間観について行ったインタビューを掲載する。

2. 子ども観・人間観・保育

I：先生の子ども観を教えて下さい。

B：子どもって常に，心が動いている，つまり常にいろいろなことに反応していると思います。それは大人と違うところだと思いますね。抽象的な言い方なのですが，心が動くようにしたいと思うし，動いているものだと思います。瞬間瞬間に発達しているというか・・子どもってじっとしているときでも，何か感じているし，それが育っているということなのでしょうね。いろんな刺激をどんどん受け入れて。見る物聞くもの全て吸収していく存在なのだろうなと思います。

B教諭の子ども観は，「つねに何かを感じている子ども」である。インタビューではさらに，その子どもに対してどのように，保育をしているか質問がなされた。その結果，子どもが感じていることに寄り添い，その気持を共有すること。その際には保育者が感じていることを言葉で表現すること。それには，子どもに対して，子ども自身の思いを外に出していいというメッ

セージが込められている。また，子どもの人との関わりかた，というものに対して，子ども同士で刺激し合う方がいいけれど，自己の経験と比較すると，子ども同士の関わりかたに対して物足りなさを感じているようである。

Ｉ：先生自身は，子どもはこんな子どもだとわかるまで，そのようなとらえかたをしますか。
Ｃ：４月にその子を持って，わかるようになるまでということですか？やはり接しただけというか，接した分と，他の保育者からの情報も多いです。自分に対してすることと他の人に対してすることとが，違うという面を見せる子どももいますよね。そういう情報をもらうことは，自分のとらえだけでなく，すごく重要なことだと思います。
Ｉ：先生は人間をどのようにとらえられていますか？
Ｃ：いろいろ考えられるのかもしれないのですが・・人はやっぱり一人では生きていけないというか，いくら強くても，人から与えてもらったり，自分からも，もしかしたら，与えたり，与えられる存在というか。そうしながら，一人では生きていけるものではないというのをすごく思う。支え合いながら生きていくものなのじゃないかなと思います。

インタビューでは，保育者の本音を聞き出したいという前提があり，やりとりの中で，必ずしもどの保育者に対しても同一の質問をしたわけではない。したがってＢ教諭や以下のＤ教諭に対する質問とは，ニュアンスの異なるものになった。Ｃ教諭は，子どもは対人関係において異なる自己をみせるということ，その子どものいろいろな面を知ることが，「目の前にいる子ども」をとらえることにつながると述べている。そして，人間というものはお互いに影響しあい，支え合っていく存在であると位置づけている。

Ｉ：先生の子ども観について教えて下さい。
Ｄ：子ども観とは子どもに対して，どういう感覚をもっているかという意味ですか？
Ｉ：子どもをどうとらえる姿勢があるか，ということです。たとえば，大きく言えば放っておいても大丈夫だとか。
Ｄ：放っておいても育つというふうに思っていたことはあるけれど，だんだんそう思わなくなってきたという感じはします。
Ｉ：それは何かきっかけがあるのですか？
Ｄ：自分が保育していて実感したのですかね。大人とのはざまのなかで，子どもは育つと思う。子どもが生きていくということは，大人が押しつけるのではなく，何らかの影響を与えて，それを受け入れるなり，受け入れないなりということである。放っておいて，大人が何の影響も与えないで育つのは，不自然という感覚がしてきた点と，子ども同士の力というか，子どもの集団としての力についていうときに，幼児だけでは，いろんな影響を与えあっていくのが，不完全というところがある。自分の感覚で言えば，大人が，ガキ大将みたいな感じになって，集団に影響を与える，一員として参加するほうがいろんな意味では経験ができるということ。それだけが，大事とは思っていないけれど，生活が豊かになるんだなぁということを思っていますね，最近。
Ｉ：人間というものをどうとらえられていますか？
Ｄ：愛されることによって人になる。そして，愛されたことによって愛を返していくというサイクルがある。そうではないと，社会というか人間として成立できない，と思う。危機感というほど切迫はしてないけれど，大きな意味では危機感があります。（その危機感に対して）自分でできることはあるし，したいという意識がありますね。
Ｉ：危機感といわれていましたが，子どもをみていて気づくことがあるのですか？
Ｄ：子どもをみていても余りにもかたくなだったり，素直に生きられないというか，苦しんでいる様を見ますよね。親の責任とは単純には言えないけれど，やはりうまく愛されていないというなかで苦しんで，そういうことで他を攻撃したりして，自分を保つというか。そういうのはよく見ます。実際にはそういう（子どもの）姿に自分も腹を立ててしまうことがあるけれど，今みたいに考えるときは，愛するということは漠然としているけれど，（子どもを）受け止めることができる可能性がある存在ですよね。保育者というのはね。何らかの力というものになれるのかな，と感じはします。（子どもにとっても）そういう経験は必ず人として必要。誰からかはわからないけれど，何らかの形で受け止められるということがないと。

D教諭も子ども同士の関わりの中という観点で子ども観を述べた。以前は子ども同士の関わりの中で子どもは学んでいくと思っていたが,保育者をはじめとした大人の影響というものについて考えるようになったということである。

また,保育者は子どもを受けとめることのできる存在であると位置づけている。これは,保育経験をつむにつれて,「子ども同士だけでは不完全」な部分もある,ということを実感してきたと考えられる。また,対象幼稚園では,「子どもにとっての保育者の意味を探る-自分の保育についての内省を通して-」という主題で,平成11年度に研究を行っていることも関係があろう。この研究で,「保育者は保育者の行為が子どもにどのような変化をもたらしたか」,について内省をふまえて深い考察を行っている。このような研究がD教諭の子ども観についての変化をもたらした一因になっている可能性も考えられる。

唐突に,インタビューで「子ども観」や「人間観」という深い問題について答えを求められるということは,難しいことである。そして,インタビュー時間も比較的短いために,真っ先に思いついた面を述べるということになろう。しかしながら,現在クラスを担当している3名の教諭とも人とのつながりという面についての言及があった。インタビューした時期は,いわゆる少年犯罪が大々的に報じられることも多く,幼児期からの人間関係の教育の重要性がマスコミや文部省(現文部科学省)によって,たびたび提唱された頃であった。実際にインタビューの中でも少年犯罪について,言及があった。このようなことが,人間関係について,考えていかなくてはいけないという問題意識を保育者が持った,と思われることに影響があるのであろうか。

このインタビューで,「子ども観」や「人間観」を尋ねることにより,保育者が目の前にいる子ども達に対してどのような援助をしたいと思っているか,という点も示すことができた。どの保育者も人間関係についての援助について言及したが,当然のことではあるが,それぞれ異なる視点を持っていた。対象園の教育課程は,保育者には以前勤務していた幼稚園のそれと比較して,「ここの教育課程は,ごく当たり前のことしか書いてないし,何もないではないかと思いました。その意味で非常に自由になった気がして,こどもと向き合うような感じが出たのかなと思っています」であるとか「この幼稚園の教育課程は緩い-それほど厳密ではない-ので,自分で工夫する余地がある」ととらえられている(山崎ら,2001)。対象幼稚園の教育課程は,保育者各々で異なる子ども観,ひいては保育の方向性を生かすことができるということが示された。子どもの援助をしていく上での発達の道筋を示しているという骨組みがあり,細部は保育者にゆだねられている,このように自由度のある教育課程というものは,明確な子ども観や人間観をもっている保育者には,自主性や個性を生かした保育を促すことができると結論づけても差し支えないであろう。

教育課程は教育目標や,子どもの実態や,地域の実態などが異なってくると再編成される必要がある。また,現在用いられている教育課程は,作成に全く関わっていない保育者もいる。実際に副園長であるA教諭は,インタビューの中で,教育課程の編成時にかかわっていない保育者は,教育課程は普段の保育においてあまり意識されていないのではないか,という危惧を抱いていることも述べられた。その上で,教育課程の見直しについて尋ねたところ以下のようなことが回答があった。

3. 教育課程の見直しについて

A: 年度末にはこの教育課程をみんなでどうだったろうと,今年はこうだったよとか話をし,それを貯めておいて見直す必要があると思います。もちろん毎年ころころと教育課程を変えるということではありません。その蓄積を何年かたって,検討してやはり修正すべきところは修正するという検討の方向が必要なのではないでしょうか。本来はそういうことをやっていかなくてはいけないですよね。実際どこの園でもそういうことは,なかなかできない。実際に研究のテーマを教育課程にあてたときでないと,見直すことはできないようです。

I: 教育課程を作るとしたら何をベースに考えますか?

D: 何をベースに考えるか?・・・・でも,まぁ作るとしたら,子どもの姿を捉えたところから,こういうことがいえるということにすると思うけれど,持ってくるものは自分が考える4歳児像のこの時期の特徴をとってくると思います。ある種自分の中にもっている物語を再構成するという感じになる。

I: そうすると先生によって子どもの姿が違うと思うのですが,どのように調整するのでしょうか。ブレーンストーミングみたいに,するのでしょうか?

D: 園の教育課程をつくるといえば,理想はブレーンストーミングとか新しい発見をしながら

お互いが足りないところとか行きすぎているところとか（を指摘しあって作成する），一応はそういう形になると思うんですけれど。

対象園で，現在使用されている教育課程は平成8年度に作成されたものであった。現在の構成員の中で作成にかかわっていない者もいる。作成にかかわっていないということと，教育課程を日々どのくらい意識しているかということが関係あるのではということをA教諭は危惧していた。そして，教育課程を改訂する必要性も述べられた。幼稚園の全体意志としての教育課程を認識するためには毎年子どもの姿を構成員で確認しあうという作業が必要であると，A教諭はインタビューの中で示した。新しい教育課程を作成するには，教諭Aの毎年の話し合いの蓄積を修正に生かすという言葉と，D教諭のインタビューの中での「理想はブレーンストーミングとか新しい発見をしながらお互いが足りないところとか，行きすぎているところとかを，一応はそういう形になると思うんですけれど」という言葉とにその答えがあるであろう。毎年教育課程を見直すということは，A教諭の述べるように，困難なことである。しかしながら，新しい構成員が入ってきた場合には，教育課程の示す意味をお互いに確認するということがA教諭の述べるように必要であろう。

教育課程の見直しという点についてであるが，実際に見直すという作業は，困難であろう。教育課程を作るというテーマで研究発表を行った立浪らは，幼稚園の教育目標を変えたことにより，ただ活動を羅列していたそれまでの教育課程を子どもの3年間の成長に見合うものにし，実践を体系的にまとめた教育課程を作成した（須々木・青木・風間・長谷川・坂口・立浪，1999；立浪・長谷川・青木・風間・坂口・降旗，2000；立浪・降旗・青木・風間・長谷川・坂口，2001）。そのうえで，1. 活動する意義を明確にする。2. 保育カリキュラムの構造を明らかにする。3. 子どもをとらえ直す。の3つを今後の課題として挙げている。この第3番目の課題こそ，教諭A・Dの指摘している点であろう。子どもを保育者間の話し合いによって捉え直し，教育課程に反映しようとすることの重大性の認識が両者のインタビューによっても示されたといえるであろう。

最後に，対象園は国立大学の附属幼稚園という性質上，毎年テーマを設定し，研究が行われている。本研究の対象園では，その一つのテーマである幼児期の自己実現についての研究をもとに現行の教育課程が作成されたという。保育者Dのインタビューの中でも，「子どもにとっての保育者の意味を探る-自分の保育についての内省を通して-」という研究が保育感や子ども観に影響を及ぼしている可能性が示唆された。このように，よりよい保育を求めて行われる毎年の研究が，保育に反映されている。これらの研究によって，得られた成果も毎年の教育課程や子どもの捉えについての話し合いには反映されるであろう。そして，教育課程を見直し，修正する際にも影響を与え，教育課程に幼稚園の独自性というものが顕れてくるのではないかと，考えられる。

総合考察

本研究では幼稚園教諭へのインタビューを通して，保育者の子ども観と教育課程との関連を示そうとした。小川（1992）は，教育課程の実施は指導計画の作成と評価であり，具体的に「指導計画」を作成する保育者の立場においては，「教育課程」の基本的枠組みに沿いつつ，いかに柔軟性を発揮して「指導計画」を作り，具体化するかが課題となる，と述べた。対象幼稚園では，幼児の自己実現という視点をもとに教育課程が作成されたが，保育者は教育課程を各自の保育というものが活かせる存在として捉えていることが示された。また，保育者の子ども観や人間観についても尋ねたところ，保育者はそれぞれの子ども観や人間観をもっていたが，どの保育者も子どもの人間関係という視点についての言及があり，それに関して援助をしていきたいということが示された。対象幼稚園の教育課程は，子どもの自己実現の発達を「基本的枠組み」としている。保育者は，自らの子ども観や人間観をもって日々保育をしていると考えられる。それをいかに具体化して保育しているかについてのインタビューは行われなかったが，保育者の援助したいと考えている方向性を明らかにすることができた。子どもに，何を援助すべきかについては，教育課程が，実際の保育に制限を与えているわけではないことが示されたと言えよう。さらに，インタビューでは教育課程の見直しについても行われた。ここでは，保育者間で教育課程の意味を確認しあうことの重要性と毎年の話し合いの蓄積を明確に新しい教育課程に反映させるべきだという問題意識が示された。これはやはり小川（1992）が述べる，「長期指導計画はこれまでの園生活の中で蓄積されてきた慣習性と習慣性によって保育者や幼児の中に伝承されてきた生活感覚を明文化し，記載したものである」ということと関連すると考えられる。すなわち対象園では，継続して研究を行っており，保育に関する知見が蓄積されているので，それらは，園独自の教育課程を作成する上での基盤となる可能性をもっていると考えられる。

引用および参考文献

広島大学附属幼稚園　2000　子どもにとっての保育者の意味を探る-自分の保育についての内省を通して-」　*幼児教育研究紀要*　21巻

森上史郎　1980　「指導計画」　岡田正章・森上史郎編　保育基本用語辞典209　第一法規

小川博久　1992　保育援助論・その２　保育において教育課程・指導計画を立てる意味は何か　*保育研究*　41-55

須々木百合子・青木倫子・風間節子・長谷川孝子・坂口やちよ・立浪澄子　1999　教育課程を創るⅠ－教育目標と実践のつながりを考える－　*保育学会第52回大会研究論文集*　2-3

立浪澄子・長谷川孝子・青木倫子・風間節子・坂口やちよ・降旗美佳子　2000　教育課程を創るⅡ－各学年の保育のポイントを考える－　*保育学会第53回大会研究論文集*　38-39

立浪澄子・降旗・青木倫子・風間節子・長谷川孝子・坂口やちよ　2001　教育課程をつくるⅢ－教育課程（表）をつくる－　*保育学会第54回大会研究論文集*　40-41

山崎晃　鳥光美緒子　七木田敦　石田裕子　中坪史典　縫部義憲　米神博子　林よし恵　道下真穂　松本信吾　2001　幼稚園の教育課程はどのようにとらえられているか-インタビューを通して－　*広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要*　第29号　205-211